

角館のシダレザクラ: 国指定天然記念物

角館の旧武家町のシダレザクラは、国の天然記念物に指定されています。町の遺産の重要な一部であるシダレザクラの木々は、地元の人々が惜しみなく世話を続けてきたおかげで、何百年にもわたって風雪を乗り越えてきました。

1770 年頃、秋田藩の家臣で高名な文学者だった益戸滄洲（1726–1777）が角館の学者を訪ねました。町のシダレザクラを見て、心を動かされた彼は次のように書きました：

「千百の糸を垂れている桜はその長きこと百尺、霧を帯び雲を裁って下にむかう、恰も万片の雪が軽く綿の様に風前に舞い、又千仞の飛瀑が大空にひるがえって半天にかかる」

益戸の感嘆の辞を誘ったシダレザクラは、かつて武家屋敷通りに建っていた梅津定右衛門の屋敷の敷地内にありました。

形容されている枝の長さは、益戸が訪れた時、木々の樹齢が百年を超えていたに違いないことを示しています。つまり、これらの歴史的なシダレザクラの木々はおそらく 1656 年に佐竹氏の佐竹北家が角館を統治し始めたすぐ後に植えられたと考えられます。